

NO MORE WAR

娘たちのみた戦火



創価学会女性平和文化委員会編

《参考文献》

- 『一億人の昭和史』 毎日新聞社
『SDIとは何か——宇宙にひろがる核戦略』 豊田利幸著 岩波書店
『核の冬』 カール・セーガン著 光文社
『核よ驕るなかれ』 豊崎博光著 講談社
『母は枯葉剤を浴びた』 中村梧郎著 新潮社
『ドキュメント リポート アクション』 幼い生命を考える会編 現代出版
『ヒロシマは昔話か』 庄野直美編著 新潮社
『核 いま、地球は…』 講談社
『原子力読本』 神奈川県高教組『原子力読本』編集委員会編 東研出版
『ベトナムは、いま』 大石芳野著 講談社
『核問題を考える』 創価学会青年平和会議編 潮出版社
『広島・長崎の原爆災害』 広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編
岩波書店
『核戦争と医学』（別冊サイエンス）核戦防止国際医師会編
日経サイエンス社
『現代の核兵器』 高榎堯著 岩波書店
『カウント ダウン』 B・ヤサーニ、C・リー著 東海大学出版会
『1945年8月6日——ヒロシマは語りつづける』 伊東壮著 岩波書店
『ナガサキ——1945年8月9日』 長崎・総合科学大学平和文化研究所編
岩波書店

《編集委員》

田中美子	武之内みどり	鈴木由紀子	吉村典子
平井愛子	鈴木エリ	福家千昭	長井恵美子
山口泉	大野淳子	石井栄子	堀本桂子
土屋秀子	中村純子	漆谷友香	吉田修子
大本真澄	松本美紗緒	小西麻美	佐藤典子
新井みちる	井筒輝子	安部三紀	今瀬すみ子
三浦弘子	古倉真利子	中村佐智子	中村妙美
山下弘子	二見弘美	小川恵美子	藤原恵子

NO MORE WAR ——娘たちのみた戦火

昭和60年12月8日 初版第1刷発行

編 者 創価学会女性平和文化委員会

発行者 栗生一郎

発行所 株式会社第三文明社

〒101 東京都千代田区三崎町1-1-9

電話 03(294)8731 振替・東京5-117823

印刷所 凸版印刷株式会社

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

Printed in Japan

ISBN4-476-07103-1

まえがき

母たちの生きた戦火の時代を、今聞いておきたい――。

平和のかけがえのなさを、平和に生まれ育ったからこそ、心に深く刻んでおきたい――。

その情熱だけを頼りに、手探りで続けてきた「女たちの太平洋戦争展」でしたが、この夏で五回の節を刻むことができました。この展示は、昭和五十六年八月、東京・三省堂書店での開催を皮切りに、福岡、山口、茨城、神奈川の各地で、それぞれの地域の体験や物品を掘り起こしながら行なってきたものです。

創価学会青年部は、昭和四十九年より戦争体験を継承するために全国各地で、シリーズ『戦争を知らない世代へ』という証言集の出版を進めてまいりました。この反戦出版が今年、八十巻で完結いたしました。これに携わり、多くの証言者に会ったことが、女性の視点から掘り起こした反戦展を開催するきっかけとなりました。

私たちはそこで、戦闘の悲劇ばかりが戦争ではないことを知りました。多くの女性たちに窮乏の銃後を強い、被害の数や規模でははかり尽くせない悲しみを刻ませ、巧妙に戦力として組み込んでいった事実そのものも、また戦火の歴史であったことに気づかされたのです。そしてその時代を、物品や写真でビジュアルに再現し、じかに触れることによって、より実感としての「反戦」を考えてみたいと願うようになりました。「戦争への坂道」「戦時下の暮らし」「空襲」「かり出された女たち」――検討を重ねながら設けていったどのコーナーの証言からも、その背後に潜む戦争のしくみや本質が浮かび上がってくるのです。それは時にたった一つの遺品からさえ甦るのです。

回を重ねるごとに私たちの問題意識も広がっていきました。それは、今もお戦火の中で悲しみの日々を送らざるをえない母や子、同世代の女性たちへと……。また一方では、空然の破壊力から人類的課題となった核や枯葉剤などの現代兵器へ……。その禍いの爪跡が幾世代にもわたる事実につきあたった時、次の世代を生み育くむ私たち若い女性こそ、これらの問題に無関心ではいけないことも知りました。

と同時に、これまで私たちの日常には決して身近とはいえなかった、国家やアジアの問題を考えさせられることになりました。それは、現実の世界の中に自分を位置づけ、どんなに地道であっても、そこから平和の実現に向かって努力することの大切さを実感した過程でもありました。

小さな歩みではありましたが、私たちはこの五年間に多くのものを学びました。しかし展示ではそれがどうしても一回性のうちにとどまってしまう。展示をがんんになった方々からも、ぜひ記録にとの励まし

をいただき、十二月八日の開戦の日を選び、二度とこの日のこないことへの祈りを込めて、ここに一冊の本としてまとめる運びとなりました。

編集にあたりましては、展示の再録とともに、核の問題を若干掘り下げ、また委員会で併せて開催してまいりました「女性文化講演会」から戦争と平和に関するものを収録いたしました。

ただ、広島・長崎の原爆と、日本唯一の地上戦となった沖繩につきましては、わずかに触れるにとどめております。というのは、この二つのテーマが、他の太平洋戦史とは同次元では語り尽くせない大きな課題であり、これまでの私たちの展示そのものが、この二つのテーマに取り組むべき規模をもたなかったことによるものです。しかしこれらにつきましては、すでに山口、広島的女性平和文化委員会の手によって『語ってよ、母さん——娘たちの戦争体験ルポルタージュ』『もうひとつの被爆碑——在日韓国人被爆証言の記録』としてまとめられており、また沖繩のメンバーからも、次回はずいぶん沖繩で展示をとの声も出ておりますので、次の機会には、この忘れてはならない問題に取り組んでまいりたいと思っております。

もとより、こうした作業も多くの方々の激励と応援があつて初めて実現したものです。心の底にしまっていた痛みを、敢えて語ってくださった証言者の方々を初め、貴重な写真や資料を提供して下さり、何の専門知識も持たない私たちに適切な助言をしてくださった方々、また講演の再録をご快諾くださった諸先生方に、末筆ながら心より御礼申し上げます。

昭和六十年十二月八日

創価学会女性平和文化委員会

N
O
M
O
R
E

W
A
R

娘
た
ち
の
み
た
戦
火

も
く
じ

まえがき

I 出会い、そして語り継ぐ……女たちの太平洋戦争展

戦争への坂道―まだ穂やかな日々が・満州事変・日中戦争・国家総動員法・そして奈落へ―8

戦時下の暮らし―生きる・祈る・逃げる・そして死―12

戦時下の子供たち―20

かり出された女たち―国防婦人会・女子挺身隊・従軍看護婦・従軍慰安婦―23

空襲―33

原爆―35

引き揚げ―中国残留孤児―38

戦災孤児―43

基地の街―45

今もなお―48

II 傷あとは今も……母たちの証言

九十通の手紙・渡辺笹江―50

八月十四日の空襲で・三原ふじ子―55

母子を引き裂いた赤紙・岡松八千代―59

百合子とともに・畠中敬恵／国三―62

一握りの塩・南沢弘栄―69

中国に生きた我が子・朝野登美江―74

Ⅲ 死のサイクルから生のサイクルへ……核の現在

79

プロローグ／原爆誕生まで／原爆は何故広島・長崎に投下されたか／広島・長崎は始まりだ

った／現代の核／核の海に浮かぶ日本／もしも一メガトンの核が日本上空で爆発したら／

S D I／核の冬／放射能の恐ろしさ／生態系の破壊／中性子爆弾／枯葉剤

Ⅳ 今、平和に向かって……ルポ・「女たちの太平洋戦争展」の五年間

105

Ⅴ 私たちのできることから……座談会・女性こそ、平和の担い手 北沢洋子・竹田佳代・田中美子・平井愛子・加藤子枝

117

Ⅵ 平和と文化を語る……女性文化講演会から

131

普段着の平和運動・黒田清 132

ドキュメンタリーの現場から・磯野恭子 139

環境汚染と女たち・綿貫礼子 146

私の歩んだ道・山崎朋子 151

難民問題について・梁敏子 153

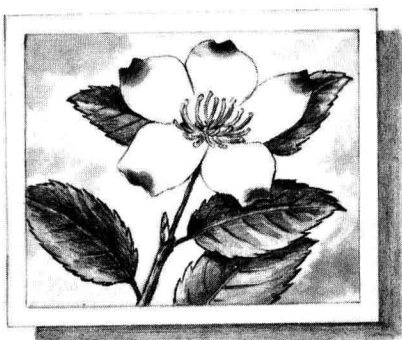
各地講演会MEMO 156

あとがき

ブック・デザイン ■ 沢井慶子 / 阿部佐知子 / 秋元京子 / 城内美加子

I 出合い、そして語り継ぐ

—— 女たちの太平洋戦争展



空を飛ぶ鳥の高みから歴史を視る者もいる
しかし、地に生きるものの背丈で、歴史を視たいと願った
人の息づかいを手放さないために……

飢えも殺戮も知らずに育った娘たちが、その足で歩き、その耳で聞き

戦争の語り部である母の中に見たものは

歪められ、踏みにじられた、ひとつの青春だった

セピア色の写真に封じ込められた

日の丸のはちまきをりりしく締めた女子挺身隊

その悲しいほど誇りに満ちた健気な瞳

若き母たちのそんな一途な純粹ささえ

「非国民」の一言におののかねばならなかった時代の中に奪いとられていった

戦争への坂道

モダンガールから

“パアマネントはやめませう”へ

戦争への坂道——それは、民衆が物心ともに軍国主義の濁流へと押し流されていく過程である。

昭和初期は、華やかな“モダンガール”の時代であった。金融恐慌の嵐が吹きすさぶ中であつてなお、大正時代の民衆文化興隆の跡をとどめていた。危機にころげ落ちる時代の中で、人々の間では、

しゃれた服装、パアマネント、社交ダンスが大流行していた。

しかし、昭和六年の満州事変以後、日本は中国、アジアへの侵略を開始した。そして、二・二六事件、国際連盟脱退、日中戦争へと、まさに軍靴の音高く、暗黒の時代へと突入していくのである。

昭和十三年「国家総動員法」が公布され、男性は赤紙一枚で出征兵士となり、女性もまた戦争遂行のための人的資源とみなされていった。

「一億一心」「贅沢は敵だ」のスローガ

ンのもと「奢侈贅沢品等製造販売制限規則」が施行されていく。軍需が優先され、生活必需品が配給制になり、衣服は国防服と呼ばれるカーキ色に統一された。女性には、モンペと防空ずきんの着用が日常的になっていく。昭和十四年には、パアマネントも禁止、昭和十七年、衣料切符制の実施。そして国民は、「お国のために」という大義名分のもとに一億総玉砕を強いられていった。

まだ穏やかな日々が

満州事変による軍需景気で、文化や娯楽やファッションの花が咲き、人々はそのかげにある戦争の影とファシズムの足音に気づかぬように時代を謳歌していた。



世界的不況が日本に及んだ昭和6年頃から、戦争突入への不穏な空気が逆行するように柔らかい布地をたっぷり使ったスカート・女らしさを強調したエレガントな洋装・断髪姿のモダンガール達が街角を闊歩する様になった

満州事変

昭和六年九月十八日、柳条溝での関東軍による満鉄の爆破事件をきっかけに、満州事変が勃発。ここから日本と中国の間に十五年にわたる戦争が開始される。

銀座の街角ではモダンな姿の乙女たちが千人針を手にした



日劇ダンシングチームに軍隊式歩き方を指導する軍人



パーマネントは「欧米のマネ」とされ禁止された都会では「パーマネントはやめませう」の標語を子供たちまでが連呼、ついに女の夢は奪われた

ぜいたくの標準①七・七禁令は身につけぬこと ②原色三色以上使用の服装③著しいハイヒール④金色一切の装身具⑤アイシャドー、マニキュア⑥パーマネント、口紅、極端な頬紅

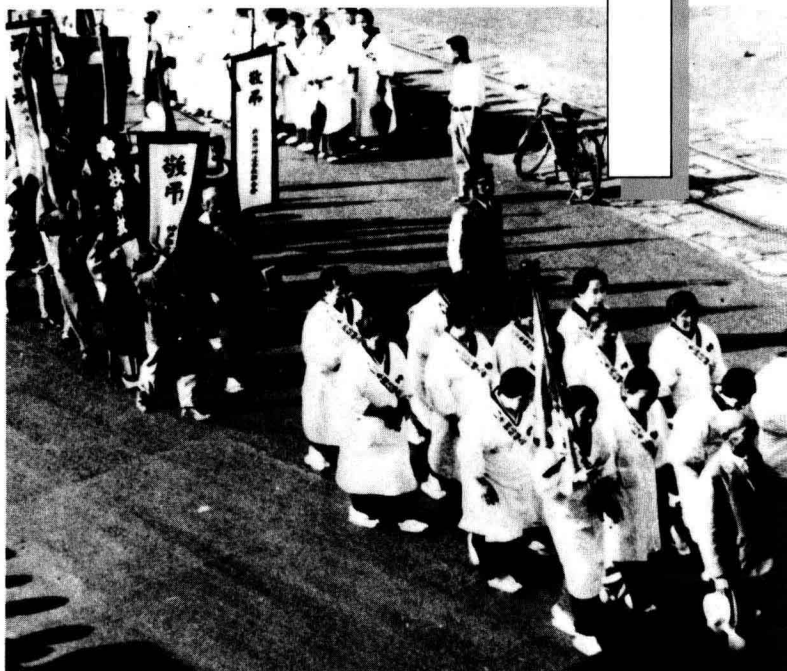


日中戦争

昭和十二年七月七日夜、北京郊外の蘆溝橋付近で日本の北支派遣軍が中国軍と衝突し、それをきっかけとして日中戦争が勃発した。



「出征前、涙ながらに書く一出征兵士です。私は妻子5人を残して万感胸にせまりながら明朝出征いたします」(発信人不明の警察署長あての投書「特高外事月報」8月分)より



千人針・慰問袋の願いもむなしく英霊となって帰還する兵士の出迎え(昭和11年9月18日・神戸)

国家総動員法

昭和十三年四月一日「国家総動員法」公布。条文の「人的及物的資源」ということばには、人間を物とみなし「国防目的達成」のための「資源」とみる戦時体制の非人間性が浮かびあがる。以後、生活の圧迫や労働強化を民衆に進んで受け入れさせるための「国民精神総動員運動」が展開され、銃後体制づくりが進行した。



軍需用品を作るために鉄製品が回収された。出さないと国賊のような気がしたという。その結果、陶製の湯たんぽが現れたり、火押し(明治時代のアイロン)が再び使われたりした



渋谷駅の名物「忠犬ハチ公」の像も銅鉄回収で「応召」することとなった。10月12日お別れの式が行なわれ名残り惜しむ人が集まった

＊国民精神総動員運動
「国家総動員体制」を精神面から補強するために、十二年十月、国民精神総動員中央連盟の創立を機にスタートした。これによって国民の消費生活から一切の贅沢が排撃され、マス・メディア等を巧みに利用して戦争宣伝や愛国精神の昂揚を図った。



学生服の金ボタンも献納させられた

そして奈落へ

昭和十六年十二月八日。日本陸軍はハワイの真珠湾を奇襲攻撃するとともにアメリカ、イギリスに対して遂に宣戦を布告。日本はこの日を境に坂道をころげ落ちるように暗黒の時代へと突入していった。



〈軍国主義への足音〉

年 代	政治・経済	風 俗
昭和1～2年	金融恐慌	
3年	軍ファシズムの足音が聞こえ始める	ダンスホール全盛
4年	世界大恐慌	ショートヘア流行、パーマ始まる
5年	ロンドン軍縮会議	
6年	満州事変	農家娘の身売り日常化
7年	犬養毅首相殺害さる	
8年	国際連盟脱退	
9年	ワシントン軍縮条約破棄	パーマメントが家庭婦人に普及
10年	天皇機関設事件（天皇絶対となる）	平均寿命、男44.8歳、女46.5歳
11年	2・26事件	
12年	蘆溝橋事件（日中戦争開始）	千人針、慰問袋さかん
13年	国家総動員法公布	輸入が止まり代用品の時代へ
14年	ノモンハン事件（日ソ軍事衝突し惨敗）	パーマメント禁止
15年	日独伊三国同盟調印	ダンスホール閉鎖
16年	太平洋戦争勃発（真珠湾攻撃）	

戦時下の暮らつ

戦争——それは、出征した兵士たちだけが戦うものではなかった。夫を息子を父を戦場に送った妻や娘たちもまた、総力戦の一翼を担わされたのである。

太平洋戦争突入以後、戦線拡大とともに国民総生産は上昇。昭和十九年には開戦時の二倍に達した（財政経済総計年報より）。しかし国民は、生活を維持するために統制経済の網の目をくぐり、必死の生活防衛に没頭せねばならなかった。有名無実な物価統制の中で、民衆の生活体

系は救いようもなく破壊されていった。

そして、……空襲である。

アメリカ軍による空襲は日本全土の主要都市を次々と壊滅させていった。昭和十七年、初の本土空襲。敗戦までの約一年間、空は、もはや日本のものではなかった。そして五十数万におよぶ人々がなすすべもなく死んでいった。家屋損失約二百万戸。被災者約八百万人。B29を主戦力とする本土空襲は苛烈を極めた。なかでも、二十年三月十日の東京大空襲は

世界史上、最大の火災をひき起こし、一夜にして十万におよぶ民衆の命を奪っていった。そしてこの都市破壊を背景として、非常時の足手まといという理由によって「学童疎開」が行なわれた。

銃後”も、まさに戦場そのものであったのである。

ここでは、戦時下の国民生活の実態を、「生きる」「祈る」「逃げる」「そして、死」という四つの象徴的なことばによってとらえてみた。

生きる

開戦と同時に国民は生活の窮乏化に突然投げこまれた。国民の「衣」「食」は一億総力戦化という美名のもとに、極端な制限を受けた。一切の必需品は「戦闘品」となり、前線への補給を第一とされた。そのしわ寄せは、民衆の飢えへと直結していった。

日中戦争開始の翌十三年には国家総動員法が発令され、その後、綿製品製造販売制限、鉄製不急品の回収へと続く。また太平洋戦争勃発の前年には主食である

米が、十七年には衣料が、それぞれ切符制となった。戦線拡大に伴う物資の極端な窮乏化の中で、人々は銀シャリと純綿の服を夢に見ながら、最低限の生活を確保するために走りまわらなければならなかった。例えば雑炊食堂が町のいたる所に出現するや、たった一杯のお湯を求めて長蛇の列ができるありさまだった。

しかし、分配の公正と称して行なわれたこの配給体制のうらでは軍部、官僚などほんの一握りの階層のみが、豊富な物

資を獲得するという物資の偏在性が生み出されていた。その一方で国民は、いつ襲いくるかわからない空襲におびえながら、燈火管制下、細々と取る食事、節約につぐ節約、わずかな食料を求めている出し、高値の闇生活が、人々の生活のすべてだったのである。

食糧事情

戦況が一日一日と激化してくるととも

に、食糧事情も次第に悪化していった。魚は配給となり肉はその姿も見られないという状況。米の配給量は毎日減っていき、昭和十八年一月、政府は米のつき減りを防ぐため五分づき米の配給を始め、しまいには米の代わりにトウモロコシの粉やふすま等が配給されるようになった。野菜は自給菜園で作り、間引きしたものまでみな食べ、ときには野菜やさつま芋のつる、ドングリの粉まで食べた。いなか、カエルなど野にいたるものは動物性食品を補うものとして利用された。

砂糖の内地への輸入は十八年には十二年の半分、二十年には十二年の十二パーセントと減少し、砂糖の代わりにサッカリンが代用された。

証言

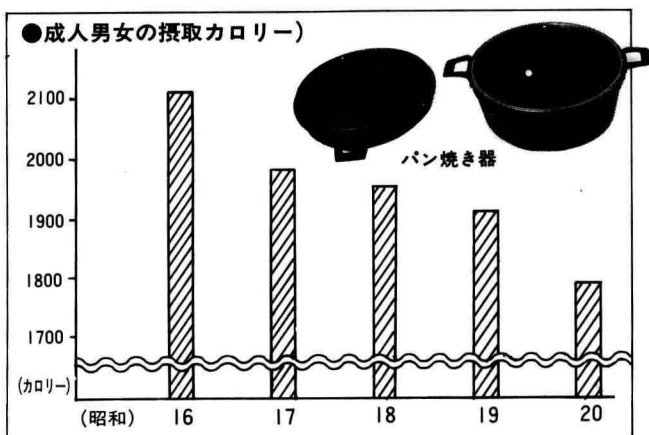
蚕まで食べた疎開の日々

神奈川／佐野とし子

昭和十九年四月、神戸から主人の実家である山梨県の田舎に疎開しました。農村とはいっても食糧はほとんど供出しましたので、とても窮屈な食生活でした。ふすま（小麦粉のカス）をこねてだんごにし、ゆでて食べたり、米ぬかを土製の代用天火で焼いて食べるな

どして飢えをしのぎました。歩いていても、ひざがガクガクするくらいお腹がすいていました。その頃、長女を妊娠していた私は「このままでは、お腹の赤ん坊が死んでしまうのではないかと必死で栄養になりそうなものを探してきては工夫して食べたものです。蚕のまゆの中からサナギを取り出して空炒りをして食べたり、木の穴の中からカエルを見つけてきては煮て食べたりしました。

●成人男女の摂取カロリー



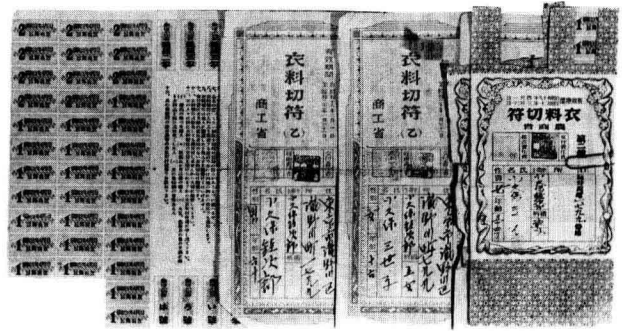
配給の入手に列をなす主婦たち。配給だけが頼りだったが延々と並んでも手に入らない時があった。大人も子供もいつもおなかをすかしていた

衣料統制

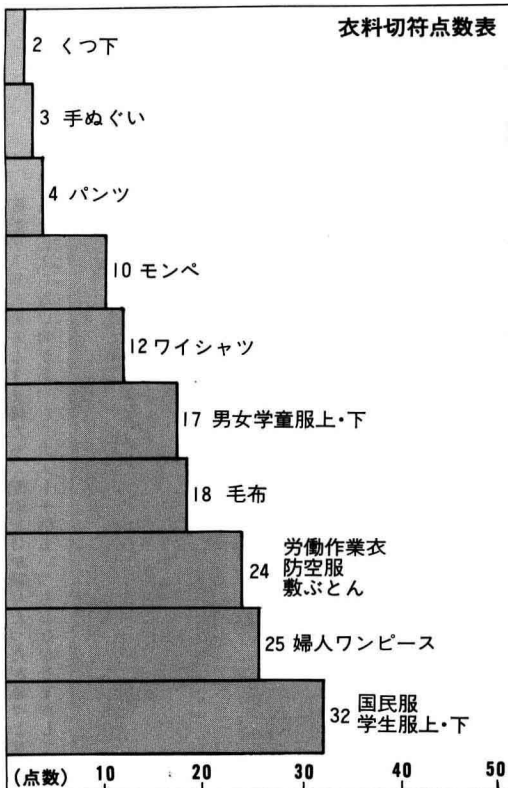
衣料が総合切符制になったのは、十七年二月一日からである。衣料切符の点数は、年齢・性・職業に関係なく、都市で一人一年間に百点、郡部八十点であった。しかし十九年になるとさらに厳しくなり、三十歳以上四十点、三十歳以下五十点と半分になった。しかも、切符があってもほしい品物がいつもあるわけではなかった。



七五三の写真。昭和19年、横浜伊勢崎町の写真館で撮影。お祝いでもぜいたくなものは着られず、もんぺ姿。千歳飴もなかった



衣料切符



敵国の大統領の似顔を的にしてのバケツリレー

バケツリレー・竹やり訓練等は隣組の活動の一つだった。一家から誰かが出席しなければならなかったが、出てくるのは残っている女の人達や老人ばかりだった。空腹のため力が入らず、失敗してはどなられたりした。実際に役立ったかどうかは疑問だが、その時は誰もが真剣だった

祈る

当時、兵隊として戦場へ行くのは当然であり、名誉なことだと教えられていた。だから戦争へ行きたがらないのは、またそれをひきとめようとするのは女々しいことであり、さらには非国民と非難されるべき行為とされていた。そして戦死は、

お国のために散った名誉の死であり、戦争未亡人はお国のために夫を捧げた婦人の鏡であった。誰もが表面上はそう振る舞っていた。そう振る舞わなければならなかった。しかし、一人ひとりの胸の奥にはいい知れぬ思いがあったに違いない。

愛する人を戦地に送り、自らも「お国のため」と身を粉にして働き、必死に生きていったのは、絶対戦争に勝つんだと、いつかあの人が帰ってくると、信じていたからにはほかならない。そう思うことが、そう自分にいきかせることが、生きるすべての支えであったのだ。

「千人針が、飛んでくる弾丸をよけるなどとは本心では思っていませんでした。でも何かせずにはいられなかった」とある人はいう。千人針、お百度参り、そして写真をかざった陰膳に必死で無事を祈るなど、とにかく生きていて欲しい、どんな姿でもいいから生きて帰ってきて欲しいとの切実な思いだった。表面では愛

する人との別離を嘆くことさえも許されなかった彼女たちの胸の奥には、せつな平和への祈りが秘められていた。

健気さの演出

当時の政府刊行物『写真週報』のページ。「夫の遺志に生く」と題する記事で、身ぎれいな戦争未亡人と子供の、ひと目で「演出」とわかる写真を掲げている。

その写真の下には、夫を戦死で失った婦人たちの悲哀を押さえこもうと企図された次のような文章がそえられていた。はたして、このような政府のそらぞらしい宣伝を、本心から受けとめる未亡人があったのだろうか。

夫の遺志に生く

「今日お習字の時間に、臨時教材で、陸軍記念日の標語を書かせてみた。二年生にはむずかしいとは思ったが、よく言葉の意味を話してやると、子供心にものみこめたらしい。

静かに朱を溶いて、真剣な子供たちの面ざしを思ひうかべながら、一字、一字に赤丸をつけてやる。
『うちてしやまむ』

ふいと、夫の面影が心の片隅をよぎる。サッチャンの健やかな寝息。和やかなほのぼのとした喜びが身体を包む。
『自分は日本一の幸せものではないだろうか』

撃ちてしまふ、とただひとすぢに大陸に散った夫、その切ない遺志をわたしの胸に、サッチャンの胸に、そしてわたしは、教へ子たちの胸にも刻みこみ、受けついでゆけるのだ」

